

「浄土真宗も初詣」

浄土真宗は、「一向宗」と呼ばれていたことがありました。

自分たちで一向宗と名のつたのでなく、真宗門徒の日頃の生活や振る舞いを、他宗派の人びとが外から見て名づけたのです。

門徒は、一心一向に阿弥陀仏だけに皈依して、ほかの神仏を当てや頼りにしないので、他宗派の信者の目には随分と変わったものに見えるのでしょう。

特に朝夕、家族揃ってお内仏の阿弥陀如来さまに手を合わせる時にも、「お参りをしよう」とは言わず、「お礼をしよう」と家族に声をかけて仏壇に参る伝統が今もあります。

初詣においても、浄土真宗の門徒はこの伝統を大切にしたいと思います。もともと個人的な我欲をお願いする祈りは、われひと共に救われる仏教とかけ離れたもので、浄土真宗にはありません。

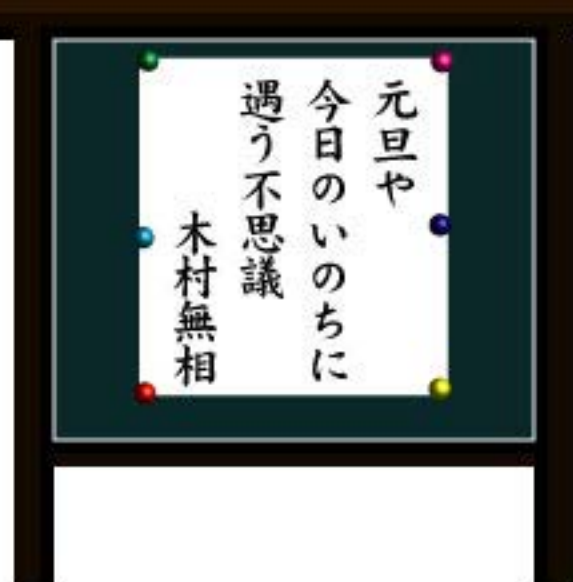
初詣は、まずご自宅のお内仏にお参りしましょう。次はご縁のある浄土真宗のお寺に参拝し、もし出来るのならご本山や別院にも参拝しましょう。

浄土真宗のお参りの心は、いつも報恩感謝のお礼で念仏します。

顧みれば、自己中心的な生活を続けている私たちです。そんな私たちにアリガトウと念仏を称える人生を与え、確かに救うという誓いを立てた阿弥陀さまの願い(他力本願)に感謝します。

自己中心的な心は生涯なくなりませんが、如来の慈光に照らされ自分を見つめましょう。何が私を目覚めさせる教えか、何が私の欲望をかきたてる教えなのかを確かめ、新しい年を踏み出すのが、真宗の初詣であり、毎日のお参りだと思います。

そして初詣も通常のお参りも、やはり大切なのは阿弥陀さまのお心を聞かせていただく聞法です。称える念仏にも、如来さまの気づけよ、目覚めよ、身の程知れよという喚び声を聞いてまいりましょう。



「お経は、教であり、鏡である」

親鸞聖人(一一七三～一二六二)や、その師、法然上人(一一三三～一二二二)が特に深く尊んだ中国の善導大師(六一三～六八一)に「観経疏かんぎょうしよ」という「観無量寿経」の注釈書があります。その中の「序分義」に如来が凡夫を気づかせる用きについて、「経教は、これを喩えるに猶なほし、鏡の如し」という喩えがあります。浄土の教えとは、善導の立場では、念仏を称えるというこ

とを指しますが、それが説かれている經典の教えは、迷いの自分を映す鏡のようであるといえます。人間は自分の目で直接自分が見えませんが、鏡がものを映し出すという用きを使って自分を見ます。そのように私の生きる姿は、念仏を称えるという教えの用きにであって、はじめて自分の迷いの生き方を知らされるというのです。そして、自分が見えてきたという自覚は、それを映し出す如来の用きを知らされますので、論理的な先後関係はありますが、自分を知ることと如来の本願を知erことは時間的には同時成立だということです。

如実知見という自分があるがままに知るといふ念仏の根本の生き方は、浄土教の教えでもこうして念仏を称えるということを通して明らかにされています。阿弥陀如来の本願により回向(届けられた)された念仏を称えるということは、そのまま如来の願いを喚び声として聞く念仏、すなわち聞名もんみょうの念仏であるということと重なります。そして、念仏を称えることが自分の自己中心性に気づかせる、つまりはそれを気づかせる如来という用きに出会う生き方を現出させるのです。

浄土教では、このように私のいのちに寄り添うように、自己中心性の自分を気づかせる用きを如来といい、その用きを他力ともいい、それが願いとなって届けられている教説を本願ともいうのです。こうした他力ということを経親鸞は、「他力といふは如来の本願力なり」(「教行証文類」「行巻」自釈)と明確に言い切っております。

こうした如来の本願力を知らない迷いの自己中心的な存在を凡夫といえます。阿弥陀如来の他力本願は、この無自覚で真実を求めようとしないうため、自分と周りを苦しめている凡夫に向けられています。すると他力本願とは、巷間言われているような自分の自堕落な生活態度ではなく、さとり智慧が慈悲として展開した如来という用きの具体性をもった願いといえるでしょう。

善導大師が、鏡を喩えに使ったのは、それがあがあるがままにものを映し出すという用きと、本願念仏を称える生活が自分のあがあるがままを映し出すという用きを重ねているのです。ですから、鏡は映し出すという用きで鏡と呼ばれるのです。私自身の話で恐縮ですが、学生時代、經典というものを偏って理解しようとしていました。

例えば、「鏡を見てきなさい」と言われたとき、「はい、縦三十センチメートル、横十五センチメートル、重さは一キログラムぐらいで、材質は……」と答えたら、「何言ってるんだ、自分の顔を見てくるんだ!」と叱られるでしょう。私は経に会いながら、「いつ頃、どの地方で発見され、何語で書かれており、翻訳者は誰それで、云々」というように、鏡の大きさや重さを見てしまう間違いと同じように、経の用きを通して自分というものを知らされるということを忘れていたように思います。無論、今でも自我が強く、なかなか自分が見えてきません。このようにせつかく自分を知らされる教えを目の当たりにしながら、思い違いをするとその用きという本質に出会えません。

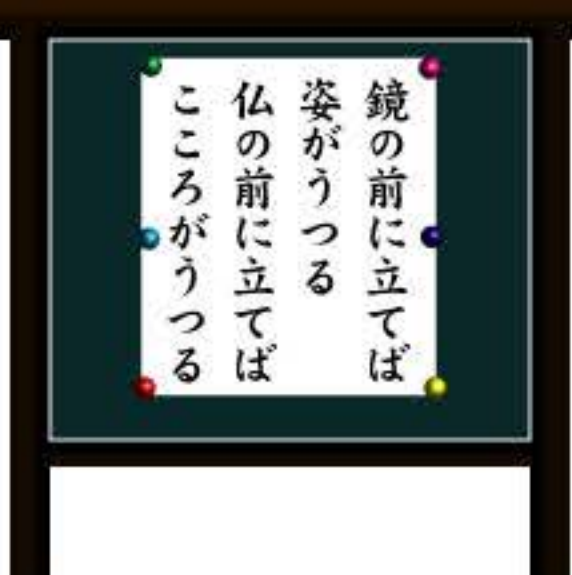
また、どれほどきれいな鏡でも次の二つの条件が備わっていないと自分は見えてきません。まず、距離が遠ければ自分は見えません。次に、角度を間違えても自分の姿は見えません。今、私たちはこの本を通して「歎異抄」が示す念仏の教えに出会っている、つまり、経教に相対しているといっているでしょう。しかし、距離と角度という二つの条件を満たさないと自分が見えてこないのです。

例えば、お寺などで法話会が開かれていたり、どれほど沢山の念仏の解説書や講座、講演会があっても、遠くから眺めている限り、それは人ごとであり自分は見えません。また、仏の話の近くにいても角度が違ふと人を責める道具、手段に教えを利用してしまいます。かつて、大学生のレポートで教えられました。「本多先生の講義は自分を知るのに大変素晴らしいお話でした。こういう話は、わがままな私の母に聞かせてやりたいと思いました」というものです。これでは学んだ教えを自己主張し、相手を裁き、批判する理論武装の道具にしています。しかし、そう言っているだけでは私も同じ穴のむじなであったと気づかせるところに教えの用きというものがあるのでしょう。

つまり、人間は自分が可愛いので、本当の自分の姿が見えないのです。その自分が見えてきたことを「機はりの深信」といいます。機とは自覚された人間存在(三木清の言葉)のことであり、その自分が深く知られるということです。この深信は、すなわち都合を越えた如来がわが身に届いていることの間違いのない証であるので「法の深信」といいます。法とは仏法の道理、この場合は阿弥陀如来の本願の念仏の教えのことで、それが間違いなく私を救う、つまり気づかせるということが深く知られるということです。

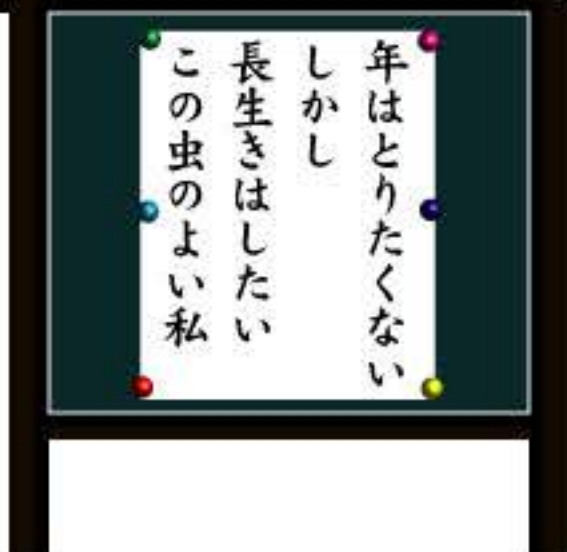
これが二種深信の道理・法則といわれ、機はりの深信が南無という言葉で表され、法の深信ということが阿弥陀仏と表されていると善導は解説をしております。法然や親鸞はこの善導による南無阿弥陀仏の六字名号の解釈を重視しています。南無阿弥陀仏とは、人間を回復する道理であり、法則のことです。

ここに大乘念仏で重視される人間性回復の道理の基礎としての慚愧ということが、この念仏の道理にも通底しているということが知らされます。すると、「善人だにこそ往生すれ、まして悪人は」(「歎異抄」第三条)というように、自分を自覚しないまま、自分を善人と思いこんでいる人が往生するというなら、悪人であると気づかされた人が往生をするのは当たり前のことだということになるでしょう。



「仙経」を焼き捨てる～お念仏は呪術から救われる

ときは三月 花のころ
お前十八 わしゃ二十
死なぬ子三人 みな孝行
使うてへらぬ 金千両
死んでも命の あるように



こんな戯れ歌があるそうです。江戸時代のものでしょうか。誰もが考える世俗の理想の姿です。

二千五百年前、インドでお釈迦様が生まれました。

そのお釈迦さまのお説きになった阿弥陀如来の念仏の教えをインド、中国、そして日本まで伝えてくれた高僧を七人選んで、親鸞さまは「七高僧」と呼んで示しています。真宗の一番有名なお勤めである「正信偈」にその教えが簡潔明瞭に説かれています。

第三祖、中国の曇鸞大師(四六七～五四二)について次のように説いています。

本師曇鸞は、梁の天子、つねに鸞のところに向かひて菩薩と礼したてまつる。
三蔵流支、浄教を授けしかば、仙経を焚焼して楽邦に帰したまひき。

「正信偈」より

曇鸞大師は魏の時代に五台山の雁門の近く(黄河の北、今の山西省)で生まれ、十五歳で出家しました。大変勝れた学僧でインドの龍樹菩薩(一五〇頃～二五〇頃)の空を学び、梁の皇帝をはじめ、多くの人びとから菩薩と敬われていました。ところが「大集経」という大部の經典の講義をしている途中で病に罹りました。曇鸞大師は考えました。

「長生きすれば、この經典の解説も全うできる。そのために、中国に伝わる仙人の術を得て、不老長生の術を手に入れよう。」

仙術の第一人者とされた陶弘景(四五六～五三六)を江南(南中国)に訪ねました。当時の中国は南北が争う時代でしたが、皇帝の紹介もあり、その呪術の奥義が説かれる「仙経」十巻を手にいれ意気揚々、郷里に帰る途中のことでした。

ちょうど、インドから中国に經典翻訳のために来ていた大変尊い菩提流支(六世紀の人。五〇八年洛陽に来る)が洛陽の都にいることを知り、帰路、流支三蔵(三蔵法師ということ)を訪ねて言いました。

「中国には不老長生の「仙経」という素晴らしい教えがありますが、仏教にもこれに匹敵する經典はあるでしょうか」

すると菩提流支三蔵は、しばらく時間をおいて吐き捨てるように言いました。

「人は皆、老い、患い、死を免れるものは一人もいない。その我が身の事実を目を背け、迷いのまま少々長生きして何になろう。

自分を見失う迷いの生を長らえるのでなく、必ずいつか死ぬ、その限りある身の事実を知らせ、迷いの眼を目覚めさせる教えこそ永遠の真実ではないか？」

曇鸞は、はたと思わざるをえませんでした。

「私は、一体何をしてきたのだろう。

仏教の業績や名声を遺すだけで、自分の本当の姿を忘れていた。迷いの中に埋もれていた」

ここに図らずも曇鸞大師に、「南無」という慚愧の思いが恵まれました。

流支三蔵は、「観無量寿経」と、訳したばかりの天親菩薩(三二〇頃～四〇〇頃)の「浄土論」を曇鸞大師に授けました。曇鸞大師は迷いから目覚め、極楽の教えに帰し、貰ってきたばかりの仙経をすべて火にくべて、焼きすてたと伝えられています。

私は、これは誇張ではなく、本当に焼きすてたのだと思います。知識ではなく、いのちの一番深いところで腑に落ちた時、人間を迷わす教えは何かということ、そして、人間を目覚めさせ、真実に導く教えは何かということが明瞭になるのです。

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

ここまで読んで下さったあなた、法話会にいらっしゃいませんか。
心よりお待ちしております。

「価値を知る」目、そして「意味を実感する」眼

私たちのモノの見方には、「価値を知る」(客観的)と「意味に気づく」(主体的)という、二通りがあります。粗雑に言えば、科学の目と宗教の眼ともいえるでしょう。

価値を知るという目は、役に立つかどうかと他のものと比べて、自分にとって都合がよいかどうかを基にしています。このモノの見方は人間がこの世を「よりよく生きる」ためには必要なことです。こ

れによって農耕生産も、経済活動も、医療福祉も、およそ人間の文明が発展しました。

このように自分にとって「都合」のよいことを求める見方を仏教では「如意」といいました。しかし、人間にとっての幸せとはそれだけでしょうか？ 逆にいう

思い通りにならなければ不幸な人生でしょうか？

仏教では生老病死を思い通りにならぬこととして四苦八苦の四苦と呼びました。では、老人は、病人は必ず不幸だと決めつけられるでしょうか？

もう一つの意味に気づく眼とは、私にとって他のものと比べることができず、かけがえがないということを基にしています。たとえ私にとって都合が悪くとも、「不如意」であろうとも、そのことがあればこそ、自分の今が恵まれたという

意味が見えるとき、この世を「ほんとうに生きる」ことになるのでしょう。もったいない、おかげさまと今まで見えなかった意味に気づくところには、自分のはからいを越えた大きな世界が恵まれます。都合を満たすことも幸せでしょうが、思い通りにならないこと、自分の思いはからいを越えて与えられたことにもよろこびや安堵、感謝を見出す生き方があると説くのが宗教、特に仏教です。

例えば、「飯を食う」と「ご飯を頂く」という言葉を考えると分かります。茶碗一杯のご飯は百円前後の価値でしょう。しかし、そのご飯に、かけがえのないお米のいのちの意味を発見したからこそ、頂くという礼法を元にした言葉が仏教では使われます。しかしながら私たちは物事を自分の都合でしか見られないので、気付かないこと、見えないことが沢山あります。それが発見できるとき、いのちは深みと豊かな安堵、不思議な尊さを帯びてきます。谷川俊太郎さんの詩集「シャガールと木の葉」(集英社)に次の詩があります。

「シャガールと木の葉」

貯金はたいて買ったシャガールの^{*}リトの横に
道で拾ったクヌギの葉を並べてみた

(＊リトグラフのこと)

値段があるものと
値段をつけられぬもの

ヒトの心と手が生み出したものと
自然が生み出したもの

シャガールは美しい
クヌギの葉も美しい

立ち上がり紅茶をいれる
テーブルに落ちるやわらかな午後の日差し

シャガールを見つめていると
あのひととの日々がよみがえる

クヌギの葉を見つめると
この繊細さを創ったものを思う

一枚の木の葉とシャガール
どちらもかけがいのない大切なもの

流れていたラヴェルのピアノの音がたかまる
今日が永遠とひとつになる

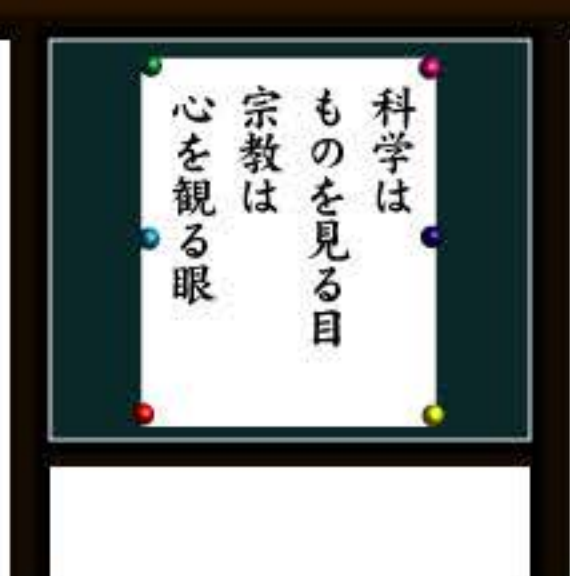
窓のむこうの青空にころとからだ溶けていく
……この涙はどこからきたのだろう

目に見えるものだけ、手に触れるものだけ、つまり数に表され、数の多いことや高いことだけを価値あることだとして、自分の都合のよいことだけを追いかける生き方、又は金や健康だけを追い求める目とは一味違った深い眼があるようです。そこには、私が価値がないと勝手に決めつけてしまった立場の人や考え方、そして出来事にも深い意味が見えてきます。

科学という有用性・効率性を重視する目が、宗教というかけがえのなさを見つめる眼により、共に深められることと思います。

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

ここまで読んで下さったあなた、法話会にいらっしゃいませんか。
心よりお待ちしております。



変わらぬ宝

私はアーユス仏教国際協力ネットワークというNGOのお手伝い(理事)をしています。海外ボランティアや現地の人から教えられることが多いのです。

神が見捨てた国と言われる最も貧困な国アフガニスタンで学校を建てる運動をしている大学の先生の話です。大学生を連れて現地に行くと三日で学生は病気になります。何の病気か分かりますか。勿論、お腹も壊します。しかし身体の病ではありません。ホームシック? 逆です。日本には帰りたくないという病だそうです。それだけ向こうの人の純粋さに打たれるのです。今の日本は政治を始め嘘とごまかし、権威やお金に汚い醜い姿なのでしょう。さて、私はどうでしょうか。



ネパールで1962年から18年間、貧しい人の医療活動に献身した岩村昇先生は村人から学んだことが多かったそうです。巡回先の村で結核の重症患者を病院に運ばなければ治療ができないで困っていた時、通りかかりの青年が患者を背負い三日三晩歩いて診療所に運んでくれました。ボロボロのシャツに裸足の青年は「お金のためじゃない」と言って謝礼を受け取りません。「では、どういう気持ちで運んでくれたの?」と聞くと、「サンガイ、ジウネ、コラギ」「生きるとは共に助け合い分かち合うことだ」と言ったそうです。「だって僕は若い婆ちゃんに人生のたった三日を分けただけだ」と去っていきました。「死んでも忘れられない」と感動の思い出を語っておられました。(朝日新聞1993年9月)

日本では、案外このお話に感動しない人もいるのではないのでしょうか。「馬鹿じゃないか、お金を貰っておけばいいのに」と笑ったり、「白けるな、格好のいいことをしやがって」と言うかもしれません。(悲しいこと、辛いこと、寂しいことです。しかし私も多面的で色々な顔があります)

大学で立派に福祉など沢山の知識を学んでいる日本の学生ではなく、高等教育を全く受けていない貧しい青年から何故こんな素晴らしい行動や言葉や思い身口意が生まれたのでしょうか。

ネパールはお釈迦様の生まれた地です。おさとの教えに、報恩、つまり、お陰様、ありがとうを育み、生み出す仏教の実践の生活があるのではないのでしょうか。

ではどこにお陰様、ありがとうの生き方は恵まれるのでしょうか。私たちと同じ浄土真宗の宗門関係学校の校長先生が卒業生からこんな手紙を貰ったそうです。

「校長先生、お変わりありませんか。私はどうしても聞いていただきたいことがありましたので筆をとりました。先生は、卒業式に卒業証書をくださいます時、「皆さんは、これを家に持って帰り、ご両親の前に置いて、ありがとうございましたと言ってお礼が言えなかったなら、この卒業証書は何の値打ちもありません。紙屑です」とおっしゃいました。私は、聞きながら、折角の卒業証書を紙屑にしては情けないことであり、一言お礼を言おうと思いました。しかし、日々の暮らしを振り返ってみると、そんな殊勝なことを一遍も言ったことがありません。また、そんなことを言えば、きっと父は「いつもと違うじゃないか、雨が降るよ」と、ひやかすそうです。どのようにお礼を言おうか考えながら帰りました。母は、「お帰り、卒業おめでとう」と言ってくれましたが、だまって家に入りました。母は心配そうに後からついて来ました。父の部屋に入り座って、卒業証書を置き、さて「ありがとうございました」と言おうと思うのですが、どうも照れくさくて言えません。しかし、先生の言葉に励まされて、下を向いたままではありましたが、とにかく「ありがとうございました」と言ったのです。そろそろ、「雪が降るぞ」と父のひやかす声が出るころなのに、その日は、なぜか、いくら待っても、ひやかす言葉が出てきません。変だなと思いながら、下からチラッと父の顔を見ました。父の目には涙がいっぱいうかんでおりました。そして、たった一言「ご苦労じゃったね」と言うのです。母の方を見ると、母は堪え切れなくなって、目からポトポト涙をこぼしているのです。私は、ハッとしました。この卒業証書は、私が勉強し、私が努力をしてもらったものとばかり思っていました、とんでもない大間違いだったのです。これは、本当は父や母がもらえるべきものでありました。私は、初めて親心に遇った思いでした。現在、親元を離れています、いつも父や母の方に向かって手を合わせております。」(本願寺新報掲載)

私たちは物事を自分の都合でしか見られないので、気付かず、見えないことが沢山あります。私のいのちを支え、成り立たせてくれているけれど目に見えない部分の無量無数の恩(なされたこと)を尊いこと、有り難いことと受けとめた言葉が、「お陰様」です。

目に見えるものだけ、手に触れるものだけ、金で数えられるものだけを価値あると追いかけるような生き方があります。それが今まで気づかなかった多くのお陰を知る生き方を恵まれると、一味違った深い生き方を恵まれます。

仏教や親鸞さまの教えは、どこかに自分の都合を思いのママに満たしてくれる仏様がいらっしゃるだろうとアテごとしたり、死んでから「あの世」があるだろうと思いこんだり、そんな話を頼りにすることでは決してありません。

教えを聞き、お陰を知り、手を合わせ、感謝の御礼をすることが私を育てるのです。今まで見えなかったり、気付かなかったことに、だんだんと目が見開かれていくのです。(教えを聞くのは客観的知識ではないので終わりがありません。丁度、ご飯もこれで終わりがないように、教えは毎日の私を育むものです。しかも、同じ話(ご飯)も日々、新しい私を育てます)

今日までの自分がどのように生きて来たのか、そして今いかに生きているのかということに、心をひそめ、思いを凝らし、深く顧みていくのです。しかし、自分で自分の全てを顧みることはできません。ちょうど、鏡の前に立てば全てが見えてくるように、教えを聞き、それに照らされる所にありのままの自分が見えます。照らされて知る自分は、どんな人であろうと美しく、立派なものではありません。多くのお陰様を頂いていることを忘れた、思い上がった自分です。

日頃は自分中心に生きている自分を学び、厳しく顧み、それに気付いていくのです。そうして自分の姿に目覚めていくなれば(脱皮=解脱=慚愧=南無)、それと全く一緒になって、今まで見えなかったけれども、私を支え包んでいてくれるこの世の事実、大きな恵みに目が開き、それを有り難いことであつたと報恩を感謝し、恩返しをしようと実践する心が自然と育まれていきます(成長=成仏=感謝=阿弥陀仏)。

お陰様、ありがとうと御礼をいう人生を生きてほしいというのが阿弥陀如来の本願、本当の願いであり、それに出遇った親鸞さまの願いです。それはこの卒業生のように自ら実際に御礼を言うことを通してそのことの大切さ尊さを実感するのであり、報恩感謝の私と育てられるのでしょう。私たちは、後の世代に何をより所とする生き方を伝えるか。いただきますと手も合わさず、畜生のように食べる生き方を示すのか、為されたことを知る合掌の生き方を示すのか。それによって、金を拝む人間を残すのか、それともいのちの無限の連帯を拝む人間を残すのか、問われることです。お金を拝み、自分の都合にだけ目を向ける生き方が、真実を仰ぎ、感謝を生む生活へ転じることを念仏による信心といいます。

【行=合掌し、報恩感謝するという実際の行動が、信=慚愧と感謝という深い気づきをもたらす】

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※ここまで読んで下さったあなた、法話会にいらっやしませんか。心よりお待ちしております。

知情意の私

知情意という言葉があります。知識、情緒、そして意地(意志)という人間の心の動きを三つの側面から語った言葉です。無論、それで人間の心の動きを全て語れる訳ではありませんが、私たちの日頃のあり方を反省させてくれる視点です。

夏目漱石氏は、『草枕』の冒頭に、「山路を登りながら、かう考へた。智に働けば角が立つ。情に棹さおさせば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。……」と言われました。

つまり人間は、自分の都合のままに偏ってはいは本当に落ち着くところはないということと教えられます。

縁起の道理＝おかげさま

仏教では、偏ることなく、ものごとをあるがままに見ることこそ、縁起の道理になった姿であると説きます。そして、そのような仏の智慧によって本当に私も周りの人も共に救われる生き方が恵まれるといえます。

日常的なやさしい言葉でいえば、「おかげさまの見える目」に目覚めることです。

山本先生という方が、三重県に本部のある全国愛農会という、農業の仕事をもっと大切にしようではないかという団体が開催した「花嫁大学」の講師として出講なさったときのことを紹介します。

「花嫁大学」に、岐阜県の養老町から、たか子さんという或る娘さんが参加しました。

「花嫁大学」はいつも、十五日間、開かれますが、十四日目、たかさんは、講師の山本先生にお願いしました。

「先生、いよいよお別れですが、明日修了式がすみましたら、三時間程、先生のお部屋においていただけないでしょうか」

「十五日間も家を離れてお勉強したのだから、修了式が済んだら、早く帰りたいのではないの？」

先生は、不審に思っておたずねになりました。ところが、
「はい、はやく帰りたいような、帰りたくないような、妙な気持ちなんです」という返事です。

「なぜ？」と、先生がお聞きになってみますと、たかさんは小学校四年生のとき、お母さんを亡くしたのです。間もなく新しいお母さんが見えたのだそうですが、たかさんは、四年生の間、今度のお母さんに「お母さん」といわなかったというのです。五年生になっても、一度も「お母さん」といいませんでした。六年生になってもいいませんでした。中学一年の時も、二年の時も、三年の時も、高校一年の時も、二年の時も、三年の時も、高校を卒業してこの一年間も、一度も「お母さん」といわなかったというのです。計算してみると、新しいお母さんがみえてから、まる十年間、一度も「お母さん」といわなかったことになるというのです。

ところが、この「花嫁大学」で、山本先生のお導きをいただいている間に、
「いくら頭がよくても勉強ができて「おかげさまのわからない人間はバカだ」とお教え下さるのが、自分のことを仰っている気がして、恥ずかしくてたまらなくなってきたのです。

それで今度帰ったら、お母さんの前に両手をついて、『お母さん、ごめんなさい』とお詫びをいおうと思うんですが、明るい所では恥ずかしくて、とても言えそうにないのです。しかし、先生のお部屋に三時間ほどおいて頂くと、家に帰りつくのがちょうど夕方になります。お父さんはまだ会社から帰っていないはずです。お母さんは、きっと夕飯の用意をなさっていると思います。そこで勝手口の方から入ると、あの辺りはうす暗いのです。お母さんの所は電灯が点っています。そのうす暗がりの中で『お母さん、ごめんなさい』とお詫びをいおうと思うのです」ということです。

「そういうことなら、三時間でも、四時間でもいていいですよ」と先生も了解してくださいました。

翌日、修了式が済むと、みんないそいそとして帰っていきました。たかさんだけは、三時間ほど遅れて帰っていきました。そのたかさんから、山本先生の所に届いた手紙です。

電車がだんだん、自分の降りる駅へ近づいてくる。謝ろう、いやてれくさい、心臓がドキドキする。どんどん駅が近づく。

駅に着き、プラットフォームに降りて、改札口を出ようとすると、「たか子、お帰り」と、お母さん。

他の友だちは、三時間前に帰ってきた。娘は未だか、未だかと、三時間も心痛めながら「母」と呼ばぬ娘を待っていてくださった。思わずお母さんにしがみついてワッと泣きました。

「たか子、泣かなくてもいい。こんどの講習は、そんなにつらかったか。でももういい、母の所へ帰ってきたんだから……」

「ちがう」といったのですか、涙で声がでない。駅ですから皆さんが注目される。お母さんがボストンバックを持とうとされる。持たせてはもったいない、

「お母さん、もったいない、私が……」

と言いたいのが声にならない。お母さんからボストンバックをとろうとする。

「それじゃ、二人で持とう」と、ボストンバックをまん中に、田んぼ道を通るとき、前を向いているから顔を見なくてもいい。覚悟をきめて、

「お母さん」と、やっと言ったと思ったら、母の足がピタッと止まりました。しばらく無言が続きました。そっと見上げたら、母が涙をいっぱい浮かべているのです。そして、母も前を向いたなり、一言、「ありがとう」といつてくれました。

うちへ着くなり、母は仏間に駆け込んで、お扉を開けるなり、お灯明をあげ、お香を焚き、亡き母の写真に向かって報告するんです。

「あなた、喜んでください。大事な大事なあなたの忘れ形見を育てさせていただきながら、私がいたらないために、つらい思いをさせていただきましたのに、そんな私なのに、きょう、わたしを『お母さん』と呼んでくれるんです。これからも、どうぞ、私を守り導いてください」

このお姿を見ていたら、こんないいお母さんを今まで十年間も苦しめてきたかと思いましたら私はもう申しわけなくなりました。云々。

以上、「おかげさまの見える目」東井義雄先生『若婦人のための法話集』(探究社)より抄出

知情意から深い智慧へ

「おかげさま」という縁起の道理に背いて理屈の智や、感情に偏り、意地を通していた自分に気づかされることで自分もお母さんも自他共に救われています。よく考えると私が親を呼ぶ声とは、実は「おかあさん」と呼んでほしいという親の願いがかけられていた言葉ではないでしょうか。

実は同様に念仏という仏道の行は私の称える名号ですが、そのまま私へ向けて「気づけよ、目覚めよ、身の程知れよ」、「私を抛り所、いのちの親とせよ」といのちの親である如来さまの喚びかける声だったと聞こえる念仏が真実の念仏だと親鸞さまはお示しです。

私の姿を知らせて下さる念仏という称名は、智によって角を立て、感情に振り回され、意地を通して暮らしにくくしている私に、おかげさまの道理を気づかせる大切な実践行です。

先人は、私が口に称える報恩感謝のお念仏が如来さまの喚び声と聞こえるように、お念仏を勧めてくださいました。お寺の法話会でそのいわれを聞かせて頂きましょう。

※加藤ひとみ著「笑顔の雫 悲しみも苦しみもありがとう」(致知出版社 書籍部 TEL.03-3409-5632)

これも、ぜひ、一読をおすすめします。小児麻痺で人生を自棄になってしまおうとするひとみさんに山本先生の仏教の世界の言葉が大きな展開を与えることになりました。

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※ここまで読んで下さったあなた、法話会にいらっしやいませんか。心よりお待ちしております。



まことのおかげさま、まことのよろこび

このような話を聞きました。ある老人が、いのちに関わる病になり、緊急の手術をしました。

「まだ死にたくない。まだまだ元気で働きたい」

という思いで手術を受けました。結果は大成功で、その後の経過も順調に快復し、以前の健康を取り戻していかれたのです。

「おかげさまで元気になりました」、「おかげさまで健康の有り難さを初めて知らされました」

このように、老人の口からは感謝の言葉があふれました。

私たちは、この老人のいわれるような「おかげさま」という言葉ならば、大変よく理解できます。つまり、

「病気が治るのも、おかげさま」、「健康も、おかげさま」ということなら、よくわかるのです。

分かりやすくいえば、自分の都合が満たされれば、おかげさまといえるのです。

それでは次に紹介する詩についてはどうでしょうか。

「おかげさま」

病気もおかげさま

死んでいくもおかげさま

おかげさま

おかげさま

「まるはだか」より

これは福井県鯖江市の念仏詩人、竹部勝之進さんが残された「おかげさま」という詩です。

「病気もおかげさま」、「死んでいくもおかげさま」

といわれると、全くわからなくなる人がいるかもしれません。

ところで初めの老人の話には後日談があります。

この人は健康を取り戻し、元気に働いておられたのですが、何年か経つと今度は手足が思うように動かなくなりました。

「おかしいぞ。こんなはずではない。こんなはずではない」

と思いながらも老衰は進行し、ついに寝たきりになってしまいました。

老人からは、以前の感謝で輝いていた表情は消え失せ、暗い絶望の表情で人生の終わりを迎えることになったのです。話の本筋と関係ないかも知れませんが、この老人は社会的地位の高い人だったそうです。

おそらくほとんどの人が、自分の都合の悪いことに向き合うと、この人のように絶望の中で最後を迎えるのではないかと思います。

たとえ、それが自分の身の上に起きている事実であるのに、都合の悪いことはなかなか引き受けられないのです。

この人は、自分の人生において、自分のいのち以上に大切なもの、大切な生き方が見いだせなかったのでしょうか？

「病気もおかげさま」、「死んでいくもおかげさま」

というのは、自分のいのちより大切なものを見出した人の言葉なのでしょう。

キリスト教詩人の星野富弘さんに、次のような詩があります。

いのちが一番大切だと

思っていたころ

生きるのが

苦しかった

いのちより大切なものが

あると知った日

生きているのが

嬉しかった

「鈴の鳴る道」より

いのちを自分のものだと思いこみ、私有化したとき、人のいのちと比較しはじめ、優越感と劣等感に振り回され、思い上がり、落ち込みます。

自分が生かされて生きていることを教え、照らし出す出来事に出遇うと自分だけでなく、その喜びや安堵が周りの人とつながります。

それが、自分のいのちに先だって私を生かそう、生かそうと休むことなく用いている「永遠のいのち」です。それは出来事ですから、名前がないものなので、どのようにでも名前がつきます。親鸞さま(一一七三～一二六二)は、「無量寿」すなわち「阿弥陀」と名付けるといわれました。

そのはたらきに出会って初めて、病も死もすべて「おかげさま」と受け入れられた時、本当に生き、そして本当に死んでいけるのでしょう。

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※ここまで読んで下さったあなた、法話会にいらっしゃいませんか。心よりお待ちしております。



過日、夏休みのある日、そば屋さんで相席をしました。

昼食の時間も終わろうとする頃、私が店に入ると、たたきの席はすべて客がおり、こあがりに二つある六人がけの席がひとつだけ空いていました。そこにあがり注文をして待っていると四人連れの家族（祖母、息子、娘、息子の子とおぼしき）が入ってきました。店内を見回している様子なので、相席を勧めると快く同席をします。お互い会釈をして座りなおし、私は本の続きを読んでいますと家族の会話が耳に入ります。所沢聖地霊園の帰りであること、よくこの店によること、親戚の誰とかちゃんがこの店が好きだということ、など断片的です。私は、おみやげを頼んでいたのものでその家族の方が先に帰りました。声に出して挨拶を交わして別れました。

相席は久しぶりでした。今まで一度も会ったことがないし、また、これからも会うことが滅多にない人とほんの少しの時間、ほんの少しの空間を共有しただけで何だか、忘れていた、温かいものを思い起こしたような気がしました。

仏教では「少欲知足」という生き方を勧めます。少ない欲で、満足を知ることです。いいかえれば、「最小限の努力で最大限の効果を得ること」ということでもありましょう。

私は、五年前の五月にこんなことを体験しました。お寺の御法座に出講するので前日は岐阜市内のホテルに泊まり、翌日、お迎えをロビーで待っていました。

私の他には三十歳前後の女性が一人いるだけで、私は静かに本を読んでいます。ところが、その女性が携帯電話でメールを打ち始めたのです。私はキーを押す電子音が耳障りで仕方ありません。私は、ふと雨降りの街の様子を見ながら、「午後も雨降りでしょうかねえ？」と聞くともなく呟いてみたのです。すると、その人は、「ええ、天気予報では降ると言っていましたよ」といいました。「ああ、そうですか、ありがとう」と私も返事をしました。なぜ、あんなことをつぶやいたのかは、表面的な私には分かりませんが、何か内なる私が工夫してくれたのでしょうか？　これが仏さまのお心を頂くということだったのかと思い出します。

ところで、全く意図した訳ではなかったのですが、この会話をきっかけにして携帯のキーの音の印象が変わってしまいました。話を交わす以前の私とその人の関係は、全くの他人でした。他人の出す音は、ノイズ（雑音）として聞こえるものです。ところが、言葉を交わした後では、排除すべき雑音ではなく、血の通った人間の営みを感じるようになりました。待っていてくれる人があるんだな、雨が降っていて外出は大変だろうな。この後、外で待ち合わせかな？などと想像できると、その人はまったくの赤の他人ではなくなっているのです。

後で考えてみると結果として、「最小限の努力で最大限の効果を得ること」につながりました。自分のあり方を最小限の努力で少し変えるだけで、大きな結果を得られるのが仏教的な問題解決の方法ではないでしょうか。

こうした「少欲知足」という仏教的生活を山口県萩市に暮らした浄土真宗の篤信者、妙好人とも言うべき河村フデさんという念仏者は、「ないもん欲しがらんで、あるもん喜ばしてもらおうよのう（無いものを欲しがらないで、あるものを喜ばせていただきましょう）」と端的に言っておられたそうです。文字一つ書けなかった田舎のお婆ちゃんが、真に豊かに我が人生を生きられたのは、今日風にいえば、「仏教者の経済」、いやそれは、「仏教者の生きる智慧」そのものを頂いておられたからではないかと私は反省させられるのです。

今、北朝鮮が攻めてきたらどうするという報道や政府関係者、そして権力者からあふれ出ています。しかし、ちょっとだけ想像力をはたらかせると、そこにはごくごく一般的な人間の営みが見えてくるのではないのでしょうか。

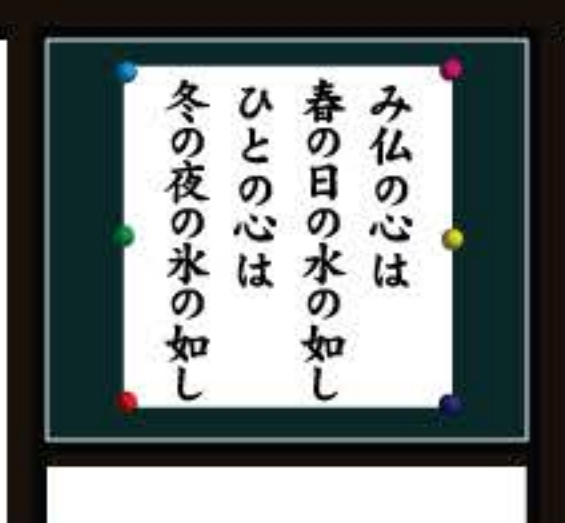
自分だけのことを考える私には、なかなかそれが難しいことですが、毎朝、手を合わせ、お念仏を称えるというのは、私に向けて如来さまから、「気づけよ、目覚めよ、身の程知れよ」と呼びかけてくださるお声を聞くことだということだということが改めて確かめられます。仏さまの心は、私を温かくしてくれるのです。

イスラエルの空爆というと人ごとです。しかし、それを空襲と表現するとどうでしょうか？　空襲の下にレバノンの平穏な生活があると想像するだけで私たちの生き方は何か、温かく、そして忘れていたことを回復できるのではないのでしょうか。「関係ない、関係ない」と言っていた冷たい心が、「おたがいもちつもたれつですよ」というご縁をよろこぶ温かい心を恵まれます。アーユス仏教国際協力ネットワークというNGOがありますが、実は何かをしてあげているだけではなく、大切な何かを頂いているようです。

今、小林信彦さんの「東京少年」を読んでいます。戦時下、東京下町から地方へ、疎開した少年の目を通して戦争が描かれています。ひもじさ、いじめ、人間関係のこじれなど、子どもながらに大変な生活が続いていました。このようなつらい思いをお互いにしないように、ほんの少しでよいから、想像力をもち、そして日頃のお付き合いを大切にすることが重要だと教えられました。

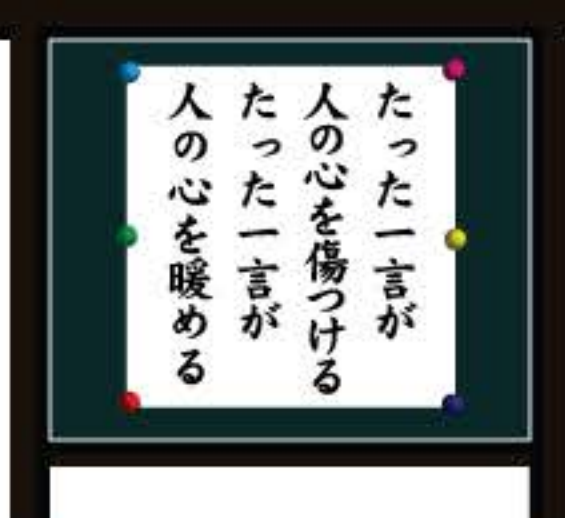
万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※ここまで読んで下さったあなた、法話会にいらっしゃいませんか。心よりお待ちしております。



「宗教とは
生涯をたくして
悔ゆることのない
ただ一句のことばとの
出会いである」

金子大栄(一八八一～一九七六)



親鸞さま(一一七三～一二六二)の言葉の聞き書き『歎異抄』があります。編者の唯円大徳(一二二二?～一二八九?)という方がその「序分」に、「有縁の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや」とあります。教えの集いが生まれるは、知識、又は善知識、つまり私を仏法の真実に導いてくれる人と出会うという一点にあります。

親鸞さまにとって何より法然上人(一一三三～一二一二)との出会いこそ有縁の知識との出遇いでした。歴史的な出会いであり、宗教的な自覚をもたらす出遇いでした。「歎異抄」第二条に、法然さまの言葉として「ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」とあります。

努力や業績を上げて認められ、救われるという世間のものの見方の権威性、差別性が聖道門自力の仏教の中にあると見届け、自力の仏教を捨てて浄土門の念仏の仏教に生きたのが法然です。その法然の言葉によって専修念仏という集いが生まれました。そして、法然を師と仰ぐ弟子親鸞という関係が生まれました。それは、法然が「私がお前の師だ」と宣言したのでも押しつけたのでもありません。親鸞が弟子として自覚したことが、法然を師としたのです。

このような人間関係は、親鸞の手紙などにも見られます。親鸞の弟子と言ってもよい関東の念仏者たちに対して敬語を使っています。また決して指導するという態度もとりません。親鸞は生涯、法然の弟子として生きたのです。

「人の教えようとする言葉に教えられる人はなく。人は自ら教えられている人の言葉に教えられる」という言葉があります。知人、大谷派存明寺の酒井義一住職に次の言葉を教えられました。

「死」は最後の贈り物

ガンでこの世を去った平野恵子さんの著『子どもたちよ、ありがとう』(法蔵館)に「人生には無駄なことは何一つありません。病気も、死も、何一つ無駄なこと、損なこととはならないはずです。そして死は、多分、それが私からあなたへの、最後の贈り物になるはずです」とある、一年の始まりに静かに振り返ってみたい。

「教えたがる人の話は聞かないよ」

これは子ども会でのある子の発言である。略。僕自身「ああ、この人はすごい人だ。この人の話をもっと聞いてみたい」と感じる人は、「自分で教えられたことを、語る人」だった。略。自分が学んだこと、教えられたことを語る人の言葉は、それが我が身を通して語られる言葉だけに、生き生きとしていて、人の心を打つ。自分の体を通した言葉だけが、人を動かし、我が身を先へ先へと歩ませるのだろう。

教えようとするところではなく、教えられたという実感がイキイキとした人間関係を生みだすのです。するとそこに、今まで見過ごしてきたことが学べる世界が生まれるということです。弟子というのは、師が許可を与えるのではなく生まれるということを教えられます。例えば、数学者で教育者でもあった遠山啓さんが亡くなった時、思想家の吉本隆明さんが次のような追悼文を書いています。(吉本隆明『追悼私記』筑摩書房、二〇〇〇年八月)

あなたは教えようとした。だからわたしは学ばなかった。
あなたは教えようとしなかった。だからわたしは学んだ。

すると弟子の心を持ったものが生まれる時に本当の師弟関係が生まれます。すると法然もまた同じ心に生きた方だったと忍ばれます。弟子が誕生するから師が生まれる。丁度、子に恵まれて親と呼ばれ、孫に恵まれて祖父母となるように同時的関係です。師が先にいるのではありません。だから「親鸞は弟子一人ももたず」なのです。

仏教の言葉で恩という言葉があります。西欧語にも、仏教以前の中国や日本にもなかったのです。インドでクリタ・ジュニャといい、クリタとは為されたことであり、ジュニャとは知るということで、為されたことを知るということです。

気づかなかったけれど、今の私に為されていること、つまり様々な縁起によって私になりたっているということを言葉で知らされます。するとそれまでまるで知らなかった時とは違う世界が開かれます。これを恩とも、報恩とも呼ぶようになりました。日本語では、おかげさまといい、陰になっいて見えなかったものが、私を成り立たせていることをいいます。私だけの力で私が成り立っていなかったというご縁を喜ぶ生き方が恵まれます。

この縁をより体験的に仏教者らしく表現したのがご恩ということです。特に浄土真宗の教えを深く生きて、泥中に咲いた白蓮華に喩えられる妙好人がいます。その一人に挙げられている浅原才市(一八五〇～一九三七)さんは、このご縁のことをご恩と呼んでいます。また、恩とは気づかされるところに生まれるもので、押しつけられるものではないということです。生涯を通して、悔いることのないたった一言との出会いを私たちは求めているのでしょう。

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※ここまで読んで下さったあなた、法話会にいらっしゃいませんか。心よりお待ちしております。

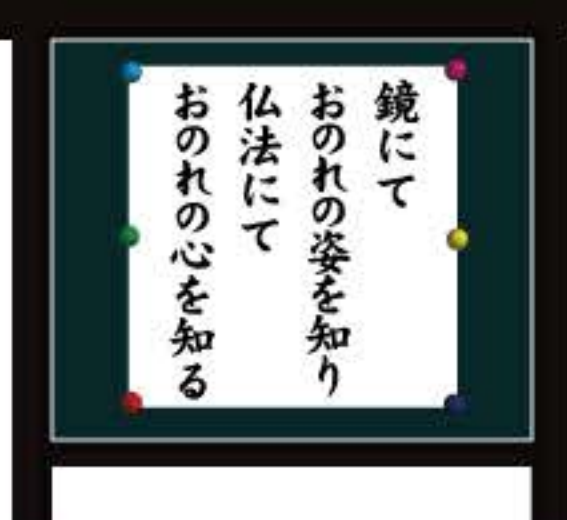
「二つの白法(びやくほう)あり、よく衆生を救(たす)く。一つには慚(ざん)、二つには愧(き)なり。

慚はみづから罪を作らず、愧は他を教へてなさしめず。

慚は内(うち)にみづから羞恥(しゅうち)す、愧は発露(ほつろ)して人に向かふ。

慚は人に羞(は)づ、これを慚愧と名づく、無慚愧は名づけて人とせず、名づけて畜生とす」

「涅槃經(ねはんぎょう)」より



現代では、写真によって、その時、その場における自分のありのままの姿を知ることができるようになりました。

秋は、旅行や文化祭、そして報恩講など様々な行事が続きます。そこで集合写真を撮る機会も多いと思いますが、皆さんはいかがでしょうか？

では、お尋ねします。集合写真を撮った時に、誰の顔から探しますか？「言わなくても分かっているでしょう。自分の顔からですよ」

というお方がほとんどだと思います。一緒に写ったお友達でも、また家族でも、あるいは先輩・先生、そしてお寺のご住職でもなく、先ず、自分から探すのが私たちですね。

ある女性僧侶が、「こういう所にも、人間の気づかない自分中心の思いに気づかされますね」と仰っていました。言われてみれば確かにそうだなあと感じました。

ところで、またお尋ねしますが、その写真に写っている自分の顔を見てどう思いましたか？

「私って、どうしてこんなに美人なのかしら」

「俺は実にハンサムだな」

とお感じになった方は少ない思います。むしろ、

「この写真、よく写っていない」

とか、

「撮るタイミングが悪かった」

と思いませんか。

試しにその“良く撮れていない”自分の写真をお友達に見せて感想を聞いてみて下さい。すると思いもかけない返事が返ってきます。

「あーら、良く写っているじゃない」

「ほんと、あなた、そのものよね」

という愕然とするような指摘が返ってくるかもしれません。

でも、考えてみればカメラは嘘をつきません。写真屋さんもワザと手を加えることはないでしょう。すると、そこに写っているのは、間違いなく、その時、その場のあなたのお顔なのです。

すると普段、これこそが“私だと思っている自分の顔”というのは随分と晶屑しているのではないのでしょうか。都合の良い姿を自分だと思ってはしないのでしょうか。

さて、これは顔・容貌だけのことでしょうか。私の心の姿はいかがですかと、私を見据えてくれるのが、お経という深い生き方を迫るお言葉です。

仏法とは、ありのままの現実の私を教えてくれます。しかし、私たちは今言ったように、自分の顔すら、ありのままに引き受けていこうとしません。そうすると、普段気づかない愚かな自分の心の姿、自分の恥ずかしい生き方などはとうてい引き受けるだけの力量すらないのかも知れません。多くの恩恵を受けながら、それに気づかずに当たり前にしている私の生き方が見えてきます。

もし、そうした力量を持つしっかりした立派な人格を持ち、仏道を学び、そして行ずることができれば、おのれを知る道を歩み、仏のお救いやおさとりに至ることもできるでしょう。しかし、それが出来ない凡夫は、そこに大切な実感を頂けます。

これを慚愧といいいます。お釈迦様は、思い上がり人を責める自分の恥ずかしさと、気づかず自己中心的で罪作りの自分に気づかされる生き方をざんき慚愧と教えてくれています。そして、慚愧を頂くと自分の行為の限界に気づかされ、悪人という自覚が生まれます。これは決して、人に向かって責め、あるいは裁く言葉ではないことが知られます。

親鸞さまは、私が称える念仏は、そのまま阿弥陀如来の願いの通り、私に向けて「気づけよ、目覚めよ、身の程知れよ」と喚びかけられている念仏だと教えてくれます。仏法によっておのれを知り本当に慚愧を知るとき、私が今、こうして生かされてある不思議さに頭が下がります。それは謝らざるをえない私の実感なので、これを感謝といいいます。

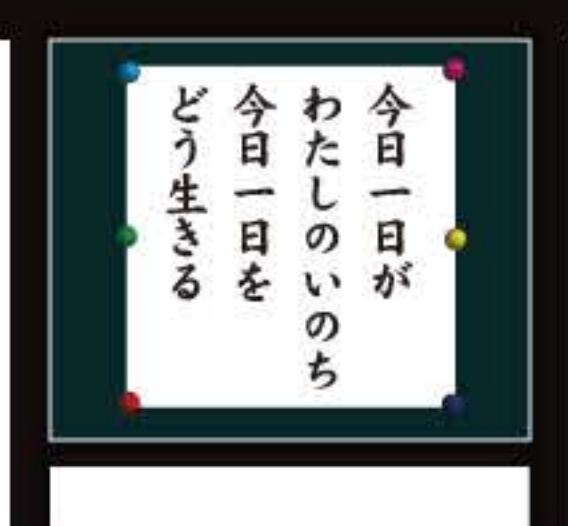
念仏を称える生活こそ、おのれを知る実践です。そしてそこに慚愧と感謝という人間回復の道が恵まれます。

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※ここまで読んで下さったあなた、法話会にいらっやいませんか。心よりお待ちしております。

「生きていくということ」

今月は、親鸞聖人のご命日法要である報恩講が勤められることが多い月です。そこで、命日という浄土へのいのちの誕生ということを通して、自分のいのち、今日のいのちの生き方を振り返ります。



「アンパンマンのマーチ」（作詞 やなせたかし）に興味深いことばがあります。

「なんのために生まれ なにをして生きるのか
こたえられないなんて そんなのはいやだ！
なにが君のしあわせ なにをしてよろこぶ
わからないままおわる そんなのはいやだ！
時ははやくすぎる 光る星は消える
だから君はいくんだ ほほえんで」

（一部分抄出）

私たちは、お金、健康、仕事、家族、趣味、能力、あるいは権力などを、普段大切なものだと思っていて、安心しようとしがちです。しかし、これらは皆、必ず間違いなく、壊れ失われるものです。その時、人間が、空を見上げ、大地を踏みしめ、涙をこらえようとするとき湧き上がってくるこの根源的な問いかけを仏教では、本願といいます。「私は一体、何のために生まれ、そして、どう死んでいくのだろうか」とそれでもなお、私にとって本当に大切なものは何かと問うところに、向こうからかけられていた願いが立ち現れます。

長野県松本市の^{じんぐう じ}神宮寺では、「お葬式の見本市」を行ったことがあるそうです。葬儀が時間を追って分かるように使われる祭壇や仏具などが展示され、また三日間かけた模擬葬儀のワークショップが開かれました。ボランティアの一人のお爺さんがお棺に入って、棺の蓋を閉じてしばらく説明をしたりしました。

そうして葬式の手順が一つ一つ、仏教ではどのような意味があるのかを説明していく中で会場に深い感動が生まれる場面もあったといいます。当日、祭壇の遺影には、住職の母の写真が使われました。九十一歳になるお元気なお方です。模擬葬儀の最後に、本人の「別れの言葉」が肉声で流れました。

「長い間、みなさんありがとうございました。……略……。お母さんにはたった一人のお嫁さんとして、わがままな私の面倒をみてもらいました。お礼のいいようありません。孫も、たった二人、それが可愛くて、可愛くて……。別れはつらいけれど、いくときが来たようだから、思い残すことは何もありません。ありがとう、ありがとう、皆さん、さようなら」

集まった人の中には模擬葬儀だと知りながら、涙を流す人もいました。

（上田紀行『がんばれ仏教』より抄出）

私の葬儀はどうなるのか、と自分の死に方を考えることは、実は今の私の生き方を考えることです。

子どもらに向けて、「大人になったら何になりたい？」「将来、何になる？」と問う私たちですが、同じ質問をこの私に向けて尋ねられたらどう答えますか？ もうアトはわずかしかない。死んでいくだけだ。などという将来性のない答えでは若い人はついてきません。こうしてせっかく親鸞聖人の教えに生きるようになったあなただからこそ、「長い時間をかけて今回人間に生まれたいのちは、やがて終わるとき、肉体はこの世に残していくけれど、念仏の利益のままに浄土に生まれて仏さまに成らせて頂くいのちを恵まれたよ。仏さまになってみんなを見まもり、導くいのちになるんだよ。」「よければ、これから一緒にお寺にいったいおいわれを聞こうね」と答えてほしいものです。

死をこえる生き方を「^{しょうじ い}生死出づべき道」、「^{ごせ}後世をいのる」、「^{ごしょう いちだい じ}後生の一大事」と言いますが、死んでからのことではありませんね。今、この生活の中で死を通して大切なことを学ぶのが仏教です。すると本当でないことが見えてきます。そこに、どうしてもよいことを追いかける私が、本当の生き方に気づかされるのです。

「生きていくということ」 永六輔 作詞

生きているということは 誰かに借りをつくること
生きていくということは その借りを返してゆくこと

誰かに借りたら誰かに返そう
誰かにそうして貰ったように
誰かにそうしてあげよう

生きていくということは 誰かと手をつなぐこと
つないだ手のぬくもりを 忘れないでいること

めぐり逢い愛しあい やがて別れの日
その時に悔やまないように 今日を明日を生きよう

人は一人では生きていけない
誰も一人では歩いていけない

（一部分抄出）

永六輔さんは浅草の浄土真宗のお寺の息子さんです。そのお父さんである住職、永忠順師のことばを元にして作られたのが、この「生きていくということ」という歌の詩です。

よろしければ、声に出して詠んでみてください。声に出すといのちに響くものがありますね。

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※ここまで読んで下さったあなた、法話会にいらっしゃいませんか。心よりお待ちしております。

河村ふでさんの
“いのちを有難く頂く生き方”

キリスト教徒として生育したお嫁さんの、とし子さんを自ずと念仏者に育ててしまった河村ふでさんは一九六五年七九歳で亡くなりました。

テレビ番組で、「お母さんのどこが好き？」という問いに日本の子は、「カレーを作ってくれること」「ゲームを買ってくれること」などでした。言い換えれば、自分の都合が満たされる時、お母さんが好きだという発想でした。

ケニアの子は、「学校に行かせてくれること」という答えもありましたが、「私を産んでくれたこと」という答えがありました。現代の私たちの生き方を鋭く厳しく問う答だと記憶に残りました。河村ふでさんも、何もかも当り前と受けとめる私たちの生き方を根底から問い直してくれるようです。

萩女子短大教授をされたこともあるお嫁さんの立場のとし子さんは、姑ふでさんの念仏者としての生き方を毎朝はじまる「おばあちゃんの独り言」を通して受けとめました。

初めは馬鹿馬鹿しいと思っていたそうです。

「今日も目が見えて下さる。

手を上げたら手が上がって下さる。

足を動かしたら動いて下さる。

有難いことじゃのう、お陰様じゃのう」

と、ふでさんは全てを「何もかもご恩でございます」と拝める人でした。

私がハッとした言葉は、お孫さんが幼稚園前の頃、
「お婆ちゃん、いやらしいよ。うんちやおしっこに手を合わせて拝むよ」
と、とし子さんに言いつけた時の独り言です。人に押しつけるのではなく、こう語ったそうです。

「頂きますと手を合わせてお迎えしたものは、ご苦労様と手を合わせてお送りします」

とお客様が来た時、帰る時と同じように食物に手を合わせるのが当然と思われていたそうです。

「人間ちゅうもんは自分しか可愛ゆうないもんじゃげのう」

と語る姿は、こうなれ、ああなれとあるべき姿を掲げて相手に押しつけるのとは異なります。そういう者同士が不思議な巡り会いで同じ屋根の下や職場で共に過ごすことになったそのご縁の不思議を拝み合う以外に、人間同士が円満にいく方法はないと思っておられたし、また「そういう人間同士が一緒に暮らすということのありがたいものじゃのう」と言われていました。

そして、心に残るもう一つの言葉が、
「ないもん、欲しがらんで、あるもん、喜ばしてもらおうよのお」

と語る姿に、「少欲知足」と示してくれたお釈迦さまのお言葉と重なるようでもあります。

本当の意味で、あるもの、いただいたもの、つまり、この身、このいのちを喜ばせていただけたら、これほどの果報者はないです。つくづく、今の私は一体どのような生き方をしているのかと深く、深く反省をさせられる言葉です。決して、人に向かって押しつける言葉ではないでしょう。

よろしければ、声に出して詠んでみてください。声に出すといのちに響くものがありますね。

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※ここまで読んで下さったあなた、法話会にいらっしゃいませんか。心よりお待ちしております。

